



令和6年2月13日

杉戸町議会議長
伊藤 美佐子 様

会派 創新
議席番号 10番 宮田 雄一
議席番号 11番 原田 壽々子
議席番号 12番 大橋 芳久

政務活動（会派視察）についての報告

標記について、下記のとおり報告いたします。

1. 視察日： 令和6年2月4日（日）
2. 視察場所
新宿区 四谷 「東京おもちゃ美術館」
3. 視察目的

《学校跡地の有効利用についての調査研究》

杉戸町は平成22年をピークに少子高齢化が進み、令和に入り学校再編計画が行われています。しかし、学校は地域における大切な公共施設であることは間違いなく、その跡地の有効活用は職員並びに私たちが叡智を絞って町民の期待に応えうる施設にしなければいけない、と予め考えていました。

そして、この課題は杉戸町だけではなく、全国で起きているものとして調査を続けていたところ、漸く老若男女を問わず0歳から100歳までが1日過ごせる憩いの場所として、廃校施設を蘇らせている事例にたどり着きましたので、当町に生かせるものか実際に視察し、考察することとしました。

4. 概要と変遷

《東京おもちゃ美術館が開館するまでの変遷》

①東京おもちゃ美術館とは

特定非営利法人『芸術と遊びの創造協会』が、運営する美術館です。

赤ちゃんからお年寄りまでの多世代に向けて、豊かな出会いと多様な出番を有するミュージアムを目指しており、「あそび」においては実際に触れて遊ぶという体験を重視しています。工作を通して手仕事を大切にす文化を育める場所、また、おもちゃ学芸員が遊びと人の出会いを演出する場所でもあります。

②成り立ち



戦前の旧校舎と現在の校舎のデザインを部分的に取り入れたイメージイラスト

旧新宿区四谷第四小学校（2007年春に閉校）内に2008年4月20日にオープンしました。取り壊す予定だった校舎は、住民で運営することを条件に残すことが許可されましたが、住民だけで運営するのは非現実的であったことから、NPO法人の誘致を検討。当時おもちゃ美術館を運営していたNPO法人日本グット・トイ委員会が新宿区で「おもちゃフォーラム」を開催したことが縁で、多くの住民から要望が寄せられ、同校舎への移転が計画されることになりました。

実際に使用していた11の教室（延べ床面積1200平方メートル）を使用し、国内はもとより海外100か国、所蔵する約15万点の玩具

の展示、手作りおもちゃ工房やプレイコーナーなど設置されています。

東京おもちゃ美術館は「一口館長制度」に基づくお金の寄付と、ボランティアスタッフである「おもちゃ学芸員」の時間の寄付によって成り立っている「市民立」のミュージアムです。

2007年4月1日から寄付金を募っており、寄付者の名前を設立記念台帳とホームページ上に公開しました。1万円以上の寄付者については「一口館長」とし、館内特設壁面の木札に名前を掲示、「一口館長証」と館長プレミアムチケット5枚を進呈しています。10万円以上の寄付者については「名誉一口館長」とし、名前の掲示と入館フリーパスの「名誉一口館長証」、館長プレミアムチケット30枚を進呈しています。寄付金総額は数か月で1000万円を超え、一口館長が500人を突破するなど、取組への住民の期待や関心の高さが伺えました。寄付金は2009年まで続き、美術館設立基金の積立や館内の内装工事費、授乳室など子育て支援機能の環境整備、おもちゃ病院の開院、ボランティア養成機能の環境整備などの財源に充てられました。

おもちゃ博物館から徒歩8分の場所には都市公園もあり、ピクニック気分でランチができます。また、3分の場所にはベジタブルビュッフェのレストランがあります。ボリューム満点でたくさんの地場産野菜を食べられます。子ども専用のビュッフェも用意されていて、子どもと一緒に贅沢な時間を過ごすことができます。

③現在

現在、おもちゃと遊びの文化を全国に広めるため、地域ならではの自然と文化の魅力あふれる姉妹おもちゃ美術館を自治体とコラボしながら全国に設立しています。

この事業は郷土を愛する地元住民の皆様と一緒にその土地に伝わる文化を「おもちゃ」や「遊び」を通して、受け継ぎ、育む空間として既に全国12の市町村に広がっています。

5. 視察内容

施設運営を手掛けるNPO法人『芸術と遊び創造協会』の遠藤氏にお話しをうかがいながら、旧小学校内11の広場を巡りました。学校跡地ということで、当時の思い出を随所に残しつつ、3階建ての各教室は余すところなく工夫され、どの広場もにぎわっていました。

実は誘致先決定に向け、東京ということもあって、利活用については吉本興業と競った結果、住民に選ばれたのは全世代型の文化を重んじたこの事業であったということでした。

老朽化が進んでいた16年前に耐震工事とともに階段を当時の半分にしてエレベーターを設置したのは、やはり高齢者や赤ちゃん連れを考慮したためとのことでした。

その後、一口館長制度についての説明を受けました。この手法は熊本県熊本城を復活させた時の制度を参考にしたそうです。例えば、当時東京マラソンのブームでもありましたので、主催側と協議し、一口館長さんには優先出場チケット付きのようなこともしたということでした。この手法が12の市町村に広がっている所以であると感じました。区からの補助金は「なし」で、家賃を新宿区に払っているとのことでした。

毎年11の姉妹都市と1000以上のおもちゃの入れ替えや、おもちゃコンサルタントの育成、有償ボランティア学芸員の育成やおもちゃDR.の育成も合わせて行い、雇用の拡大につながっていると話されていて、地域まるごと社会貢献事業となっています。

100か国のおもちゃを、10万点、毎年1回テーマを決めて展示。

障害児福祉のおもちゃの研究も進んでおり、年間の利用者は10万人。赤ちゃん専用の広場は木のぬくもりに溢れ、もともと理科室だったメリットをフル活用していた。床は多摩産杉の木が3センチの長さで敷き詰められており、すべてのおもちゃが口に入れても大丈夫なようになっています（1人使用の度に学芸員が消毒）。

11の広場は11の特色があり、廊下もすべて工夫され、仕掛けがたくさん施されていました。頭脳を使うゲームや、世界の初めてみるゲーム体験など、平日半年パスポート券（大人3900円・こども2900円）を購入したくなる地域の皆様のお気持ちがよくわかりました。創作意欲を掻き立てる「いとこの部屋」や、工房も充実していました。

また、施設2階には、日本全国の作家、おもちゃ工房、デザイナーの作品を常時500アイテム以上展示販売するトイショップがあり、購入することができます。

- ◆ 2012年「第7回ロハスデザイン大賞2012」コト部門大賞
- ◆ 「READY FOR OF YEAR2014」大賞
- ◆ 2015年「日本フェンドレイジング」大賞

◆ 2018年「低炭素 文部科学省大臣賞」

施設利用料は、平日大人1300円、こども800円ですが、ネット割もあります。他市町村の利用料はまちまちで、山口県長門市は400円、沖縄県国頭村は200円、静岡県焼津市は500円でした。

直営は3館ありますが、姉妹都市協定を結んで、学芸員が随時いることの理由と大切さの説明を受けました。

6. 姉妹都市

東京都檜原村・静岡県焼津市・長野県木曾町・香川県高松市讃岐
徳島県板野町・徳島県那賀町・高知県佐川町・山口県長門市
福岡県福岡市・沖縄県国頭村

7. 視察を終えて

期待以上の施設であったことは言うまでもありません。

何かを成し遂げるとき、町民と十分な協議を重ねることは大事ですが、それを担う我々議員や行政側に「この町の一人でも多くの人の幸せな空間づくりがしたい」という熱意がなければ、良いアイデアを引き出すことも、良いアイデアに行きつくこともないと思いました。

財政を言い訳にするのではなく、多くの先進事例を目で見て、聞いて、そして考えること、町から一歩も出ずに日々の仕事に追われてしまうと、よい会議体も作れないと実感できた充実の1日となりました。

できれば、できるだけ多くの議員や職員に足を運んでいただきたいと思いました。